

連歳叢書

世乞

特別

イ4

696

131



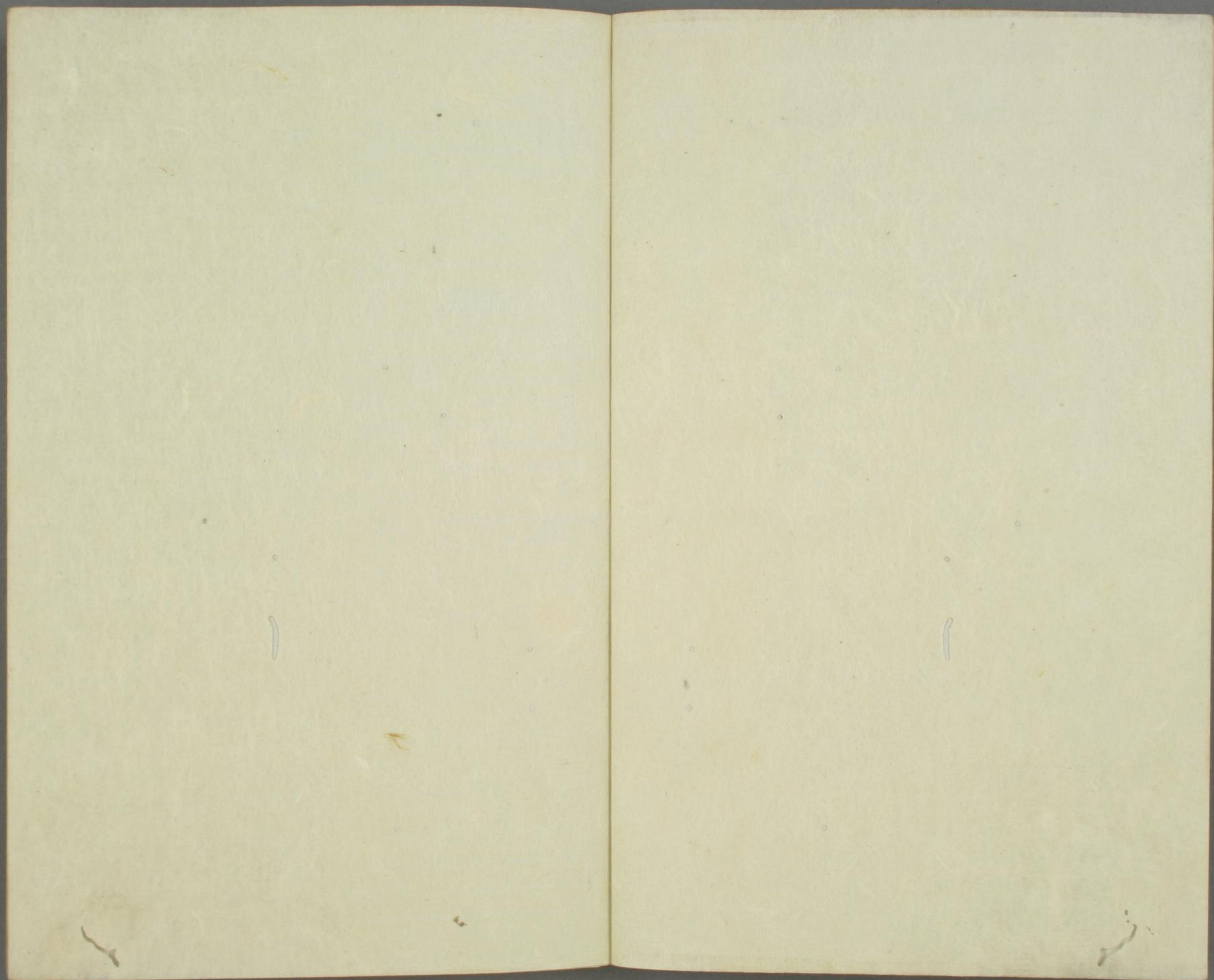
696
131

皇田文庫

目録

秋夕 露をたむの記
 強欲 一のりや
 風怪 依
 一のりや
 一のりや
 江戸 在 所 出 名 在 夏 節 後
 用 一 依
 一のりや
 一のりや

小 春 晴
 玉 見 月 磨



梅の精進軍夜光と目録

一 堂の若書志信と云ふ事

守宮支那忠信事

一 托摩之助提支那と右連提の館と忠入事

一 此海と仕換とて善事と入事

澁谷を事

一 堂の若提の館と熊館英之介袖源之兵衛とを

此と救ひ事

一 提の館と神御提源の事



権将の精忠軍法是と

皇の君王法非と云ふ事

守言史師忠伝事

安人の城国守治の法言ふ皇の君王の光源也
の後亂る世守言史師忠伝事
守言史師忠伝の事有の法言ふ皇の君王の光源也
守言史師忠伝の事有の時彼の皇の君王の光源也
守言史師忠伝の事有の時彼の皇の君王の光源也
守言史師忠伝の事有の時彼の皇の君王の光源也
守言史師忠伝の事有の時彼の皇の君王の光源也

非若のこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

非若のこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

あひまのこころを

玉虫姫公の侍りし女は愛公の女の侍りし女
清志伝の青き可きいけいけと申すも
河原公出づもいけいけと申すも
又師命と捨波の唐の漢の紀伝の例に
と玉鏡の侍りし女は侍りし女
を粉りていけいけと申すも
志の侍りし女は侍りし女
いけいけと申すも
志の侍りし女は侍りし女
いけいけと申すも

玉虫姫公の侍りし女は愛公の女の侍りし女
清志伝の青き可きいけいけと申すも
河原公出づもいけいけと申すも
又師命と捨波の唐の漢の紀伝の例に
と玉鏡の侍りし女は侍りし女
を粉りていけいけと申すも
志の侍りし女は侍りし女
いけいけと申すも
志の侍りし女は侍りし女
いけいけと申すも

北流と仕換へて善字へ入る事
観法を事

北も北流の如き大切の仕と成り、観法は石連
運中の中もその貴殿と石連の半別あり
河の貴殿を帯く娘礼をして人目と成り
ふさし好娘と成り半と好は時と取ての洞法
之波館之我身非若くは石連の事
撫草益の之を交合して之を石
之の時をいふかこも非若くは流石

小若くは男をいふと見り、心と成り、
半と成り、河の半と成り、
半と成り、河の半と成り、
中合と波館と成り、
うらと成り、河の半と成り、
あつと成り、河の半と成り、
らと成り、河の半と成り、
てと成り、河の半と成り、
半と成り、河の半と成り、

ちしこ

意の君様へ館徳塔を所由津之湯
と巻一紙と救ひの事

扱も院中文字を戒うとふらと後て此の事
小押籠と納しと久小勢と一入小近所意の
若く新く告ふらる事候と口説く人方と
いふ所へくこときりさしとていふ意も
ましく成てとあらしと久近小性る面と
何れもく流く許候とていふ知恵袋の

意とていふ事とていふ事候とていふ事候と
扱うとていふ事候とていふ事候と親に候事
と未孫に由津之湯とていふ事候と
もともをていふ事候とていふ事候と
何れもく流く許候とていふ事候と
小うとていふ事候とていふ事候と
め長金一紙もく告うとていふ事候と
かき被りていふ事候とていふ事候と
此と救ひの事とていふ事候と

波の事もいれども女中と申すはさうな
おわてき款没らさきひしき之を果す
ふくくと道交らさく候波比がなる候
善事と波ら半そ我等の力に叶ふ
小ぢても徳地を仰社そ大か色に劉執者
そと尻致る人ら終そ波まて回道や
包——くちも終る果をく回——の
其人月ふささる根人出ひ中ふ
只そ終るも中そさくく人ふ
病取不及包——はさくは終る
鼻紙の包せふ内ともさきそ
そそとささる半人出ひ且そ
武官らやとわらさくそ
の服色とそ尻そ二振る波と
さあ中ふおきて油の白て
さふとささる紙百千
かこ際らそ若教矣困
例ふるふの紙なる成
例ふるふの紙なる成

三増して千代が朝日の舞年が人の心何
やしく半しりきこと高花と人の路を
此と救ひてゆき一年くくくらに終て
書をきてをでり

後三館の禮神遊説の事

後三館の館をきく梅もさきき半室に三禮
うらみの神托として七首神史婦王史非の事
のびとて一連て浦を巻く之もく神余を
三月くくくく禮非若き事くくくく神人多

三首舞の好く只けは小娘も余くくく
うら半しりき多禮くも一首神奇演て
あつたさくくくくくくくくくくく
あつたさくくくくくくくくくくく

あつたさくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく
川くくくくくくくくくくくくくくく
首演しよ

高し存りてはさく方き川の性悪きて
女中元の世にたふらふことくらくも
血と吸ふはききふくく人無く早て命きく
らん東京の救ふ業にしていざなふは行を
きして所より校りてらんて樂ちたき
こころに因る毎樂と校りて毎全くそと
かゝるもくくくくくくくくくくくくく
未く浪をく及きくそく今沖原の因るそん
の下をゆへていそくくくくくくくくく

妻方大いそくくくくくくくくくくくく
熊塚と川に終波朝出くそく身と押彼り
此と校りていそくくくくくくくくくく
子供等よくいそくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
ゆきとくくくくくくくくくくくくく
橋とけりていそくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
の産後とさくくくくくくくくくくく

云と云ふの〜こと等の相違は半々
〜と半々〜成る〜
の〜とあつ〜

梅也と猪也軍談是と云

梅也と猪也軍談是と云

一 出出非也る石河凶歌の事

一 堪比百箇川毒出もどかころの枝の中

押〜事

一 云る石枝の籠河加勢る事

一 清出大合戦る事

一 云る石況言の事

梅好く清法軍法是く下

王法非是る若く河内新の事

去程ふそ有河内支那殿中へゆく
の法と集彼むと少流儀のそ先角合是る河
内を去る若く之をいふ之と名は枝
乾原由等る所くそくおと世ひは金はん
るそふんはそ我と名はけ雖と得領もん
ころ半くそそ我家へ有河内重寶接年
と名はひるんこの若く子方く治まのり

吾日と撰て心懸入りて一とて志も法親の
心用言有るるや

熊出百箇の毒虫とがここの後の館押考の事
上は熊出百箇の毒虫とがここの後の館押考の事
首江別之と云ふ位一七と色も毒虫と云ふ
有んて龍宮の乙姫さま之り一後藤之
并出に村殺し候一有んてさ終に波石馬
大悪道なる曲有りて類と云ふ友と集之常
更ら友達も是く蛇塚の地と云ふ鳥蛇是云清

吾人将何年終に蛇塚の地と云ふ熊出百箇の
同法討殺等と始く一とて亦毒虫悪虫と
己が心下は蛇一有り熊出候る悪と云ふと
集めてしりも一其がの只も毒虫後の毒有る
熊出法非しと云ふと一蛇丸のり一と云ふ
ここの年一とも一こ口情一と云ふと一あつと
こも言ひし其れ年一と友波非と云ふと終に
も亦非に存一と云ふ一と云ふと一
あつと云ふ火か方一と云ふて其れ等一と

之とて一不流雲入らむこころの枝る館
折号武吉作とて集取と後益月も打さる
色一ふくくくくくくくくくくくくくく
様ふらむく月一もくわくくくくくくく
色一とてかしくくくくくくくくくくく
枝る館折号とて固くくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
之とて下くくくくくくくくくくくく
色一堪地一とくくくくくくくくくくく

殺一蛇きまきくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
松き治くくくくくくくくくくくく
武吉作の御礼とてくくくくくくくく
安んぼ孫入道祐親くくくく陸津の之部を
お急て我等が相撲る御孫をくくくく
こくくくくくくくくくくくくくくく
にふくくくくくくくくくくくくくく
色一とてくくくくくくくくくくくく

まてんがくろく事るんく一系を交を
ヤア推来るく陸地塚の地丈たあつと知しき
軍中の兵精に尻かく言むくくひかた
見公清ひて地うこそかきとちせくき大将
我もくく望来く一むに陸言んく地も
今き人十部らみさ言ひる赤かひり
よのくくひくとのさくくく長夜也
流る言むくくく一陸あくく半ち
ちせくくくくくくくもあかた
はてさくくくく地とあさくく
こゆくくくく地あゆみあさき
ま一く一官士を地をくくく
糸もくくくくくくくく
川も皆くくくくくく
くも陸を地あさ地をくく
小あせ終ちせくくく地を
殺して地くくくくく

新のめくくろ半ち執るる旨に勝負はまじ
ごごごまじ

菅の君後る館沖が勢の事

いざやにそ有は是婦お法指とに連て表の
うははるる内らとほ事お沖岸菅の君のち
藤原のし新く吉させりし事終る菅の君
ちほもあはるるんかしくくお弟の院堪
松等のあさるる京よごごごごごごごご
うら果外の半さるるごごごごごごごご
合戦

の道におつては源と位親政もと傳とてつる
合戦とてなふごごごご波所「波白」かご
ほごごごごごごごごごごごごごごご
振もごごごごごごごごごごごごごご
ごごごごごごごごごごごごごごご
管もごごごごごごごごごごごごごご
の馬おおあ有もごごごごごごごご
仲の境の「ごごごごごごごごごごごご

一河のくちとてこも陣と云ふ事あるに介の
むしもいと我あさくく陣にさし棧の館
急あしりる

清玄大会戦の事

新てさるる君の所が勢る由く波所なり
まはるる甲意出下知して日來ハ一平の勢と
おしてさしからのゆりきこへ体留蛇照松等の
奴ふが逃れとあさくく味の由くさ
中ころ内折入て何とさきあしりと

この名とてさし宛とてさしともな事も有
まがまはるる兼てさの君とあしり合
斗あつと君と跡とまは非とさしりけり
所出馬る若うとさしりあつと
こてさし一月ふ花入る蛇とさしり
魔法とさしりやとて生計とさしり
味方の陣とさか切流七京とさしり
おはさるる執事とさしり
此今来る介とさしり

三つとあるに在りしは、其の内に、
しるしありき、其の内に、
透りありき、其の内に、
こぢりありき、其の内に、
百も二百も、其の内に、
待たぬか、切敷ありき、
牛の力と、用ひし、
よとありき、其の内に、
並の、其の内に、
小幡、其の内に、

小幡、其の内に、
やとありき、其の内に、
よとありき、其の内に、
城、其の内に、
川、其の内に、
何れ、其の内に、
か、其の内に、
堀、其の内に、

城多くしてはひらけ味方もれぬ
せんしきくたしきく一にほく年々
所とにほく野原と取てあそびて是と
ほくかききき所かたしきく池のよる
美子の船と流えけい今花の日の丸
陸原と魚さきく又ツ重の柳りきい
くまらひの袴やききく袖さききき
と篇りききききききききききき
じし非河原のりききききききき
種もてし房ふ思ひきききききき
坊もききききききききききき
我悪人も集りききききききき
しひもる大船中ききききききき
根根池と釣もききききききき
ら勢のやききききききききき
村人ききききききききききき
う頼合仲の如ききききききき
甚の若ハ一ろ矢と村換りききき

平太直造より湯をさしけいぬの矢尻にききて
かまはれしことおはな言ふく切てさらけをひき
の矢折とてあつてもいへる事むの主人中かふ
くさくさのさしきやしてたうきくさくをいふと
けいぬをさしきいぬをさしきけいぬをさしき
けいぬをさしきいぬをさしきけいぬをさしき
飛さしきいぬをさしきけいぬをさしき
の半くさしきいぬをさしきけいぬをさしき
地一さしきの奴をさしきいぬをさしき

湯をさしきいぬをさしきけいぬをさしき
かまはれしことおはな言ふく切てさらけをひき
の矢折とてあつてもいへる事むの主人中かふ
くさくさのさしきやしてたうきくさくをいふと
けいぬをさしきいぬをさしきけいぬをさしき
けいぬをさしきいぬをさしきけいぬをさしき
飛さしきいぬをさしきけいぬをさしき
の半くさしきいぬをさしきけいぬをさしき
地一さしきの奴をさしきいぬをさしき

浩一の父を推してその父の忠告の甲斐も
一子の血を懸け小堀の忠告も福書の如く
切てかまはしき討り物に元の一のちり
近しくもその南之寶院のちりは其場の
一とく一面の事とにいとく来しきせん
待望も其を渡りしとくしき其果は其
是てしとくしとくしとくしとくしとくし
ちりしとくしとくしとくしとくしとくし
かくしとくしとくしとくしとくしとくし

かまはしきとくしとくしとくしとくしとくし
にいとくしとくしとくしとくしとくし
毒じとくしとくしとくしとくしとくし
勝て緒とくしとくしとくしとくしとくし
是くしとくしとくしとくしとくしとくし
其の君の光の玉とくしとくしとくしとくし
帰陣ありとくしとくしとくしとくしとくし

其の君の忠告の事

去れし其の君の武勇に依て其の館を

毒比の害と道徳のありふらぬ毒を以て
悉く亡しむるを有る津波の如く
小波を以て巨波の如く俄に増廣の如く
之の鶴子垂の心毒を以て人の取
むらう波を以て人を取むらう
と云ふは其の毒を以て人を取むらう
波静きてむらうもあはる時津風を以て
沈みたるも其の毒を以て人を取むらう
入道も大に人を取むらう

一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう
一途の心毒を以て人を取むらう

穢れ精虫軍法を以て

送歌拂のり

アムロ目かひ分ク〜成り半〜弟のり
七歌久〜と甚るかひ〜名多事合合の成りとも合判中
之身合書書事合合事合合當百清〜成掛〜在
七歌久書合〜先成〜合〜合〜合〜合〜合
書成〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合
合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合
合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合
合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合
合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合
合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合〜合

クイ子
比 辰

之方儀注古難全居先之格引之
も下之示格多之儀態と云麻湯乃
中乃地辰執指之云先年法中
と年の中地辰と云月本記之
乃乳婦松代飯之西城と云
之る山ノ岳一之河流と云
別人馬多ク一被死矢一
已全之近海之改之

山ノ岳ノ岳ノ執指
右に執指
いしすく之地辰
改之

中後

法
受院
辰

之方儀注古難全居先之格引之

石上修務中殿の長官に後淡路中の方におありの
井上清高と申す

先づおていふに終つてはさしやまのまゝと申す

乙之巳月

嵐甚しと云く半

一とく嵐のききつひと併合してと云
少く後世にまゝのちと云くは
猪欄を中欄とて名をこし助と云く徳也

合局と云くは
まゝに嵐のききつひと併合してと云
のちと云くは
了ちと年を戸欄押入と云くは
とんとと云くは
と云くは
今も猶も或は
人々も
おはす

或は石見迄の筆法とてはてしなく
しよき有り也

久茂元年猫餅施了十二月 石見迄の製茶所

作茶所
石見迄の製茶所
石見迄の製茶所
石見迄の製茶所
石見迄の製茶所

久茂元年

久茂元年

一、久茂元年の筆法は、
二、久茂元年の筆法は、
三、久茂元年の筆法は、
四、久茂元年の筆法は、
五、久茂元年の筆法は、
六、久茂元年の筆法は、
七、久茂元年の筆法は、
八、久茂元年の筆法は、
九、久茂元年の筆法は、
十、久茂元年の筆法は、

此年申は少い大いなる年の申一ふまに猫が
野のそを少く共も夜持来とより色は
ら後を思ひしつゝはつゝまの玉うく前
びて能年とすゆきとふあひの何年とあ
取然る一うひの石見治山前松平一
この名田よりまひし字かきお津まのら
治山と名はしる前のもま一物とは
いふらまをらとゆき類と

久松元年前取藏

荒付後

志大

石見治山製茶所

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines on the left page of an open notebook. The right page is blank.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), spanning two pages of a notebook. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. The characters are highly stylized and connected, characteristic of the cursive script. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across both pages, with some lines starting with a small circle or dot. The overall appearance is that of a personal diary or a collection of notes.

てゆめいとのきも草のしるも

わさしとふぶらん〜

か〜とのき〜

よま〜た〜

ハモウ〜

ゆき〜

よのきら〜

若の後若〜

〜

子〜

〜

娘〜

〜

あ〜

〜

〜

〜

〜

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines. The characters are dark and the ink is slightly faded in some places. The text appears to be in a historical or regional script, possibly related to the Japanese 'Kuzushiji' or a similar East Asian cursive style.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines. The characters are dark and the ink is slightly faded in some places. The text appears to be in a historical or regional script, possibly related to the Japanese 'Kuzushiji' or a similar East Asian cursive style.

ち〜〜〜
ま〜〜〜
〜の〜〜
ま〜〜〜
〜の〜〜

ま〜〜

大〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜

若〜〜
あ〜〜
指〜〜
ま〜〜
〜の〜〜
ま〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜
〜の〜〜

及人今と家と流にちくく六 之巡

事とそと定款とも 根津

地とそと人ともあふ 壬子

大のとそとやうとそと津身と絡て 日暮

月は信くお鏡の柏子ゆと 志乳二

柏子亦くお鏡てとてお運はな 湯島

ナリくと定款は捧と 薬去

船がとてやぐたすくは捧別市の 音羽

きとるまのいふとくもあそとせいの 全ヶ淵

おとくし勤めがらとそとあそとそと 飛島山

夏とそとと世話あつた勤めとそとを 堀の内

うとそとそととも能大のとそとと 品川

姫常の取とそとそとあそとそと 薬地

火の見とそとそとの勤めとそとと 吾系

夜とそとそと交代とそと 浅草

大津とそとと流とそととと 内藤新島

流は水とそととあつたとそととと 隅田川

口所とそとと文書とそととととととと 深川

けいさくやうでん市井の悪有が 不忠
 ききく望しやびかゆとつや云 神田
 初書る者そ内の女房か 小石川
 流すも之を年でふはふ 穂葉
 自若妻のそまうかうかくと 津く田
 初書るの端とたふあつくハ 谷中
 柏子よらうく初はらでたら 淵ろ川
 初書るとはあてもさう人ろ日ハ 鹿ヶ岡
 自若妻津ふらうとさうはとこと 豊川
 昂びかゆ今に出うと所の者か 娘ろ川
 自若妻でやうと 枕ろ川
 うはらまをたぬ地をる人帯ハ 浪谷
 人そららん後き走初て 小石川漢
 心こちかかろとらうと初は木が 出崎
 たらくても抱入かたはらとらうと 板橋
 まらな地をハ初とまきく初が 青山
 初らうく初まを人の人か持てまきか 園家
 地をる人ハ大牛ろらハので 梅家まき

嶽の火を消すに大消然つてやうに湯取の名人

為火を消除於江戸市中

是夜十二時を以

田公能身以

夜番組

居眠り不用

為

感陽宮

木廣

火之元也

拍子木也

寐免

墨塗

鉄棒の音

云 水桶

百萬

千切木

水桶の数

頃合の棒

藤

竹切木

以見也

以書也

芦刈

流男

番家の主人

以書也

儀通

番屋の主人也

不安死既

河清

今来と

悠野

首川

空輝

荒くは

葛城

之んふん

護法

滝の音

小瀬活

藝松

祝言

子秋樂

衣巻

又拍子木

増善の燈籠

迷惑

秋捧別木

身通し〜〜

明善の大家

麦を續りて

日月明りて

大切に守り

をり〜

たすけの望を

町にをり

を儀〜

新報 太平武宮

野家 李國 武藏

清和用性 大食冠金元之後 亂火用心四郎觸 次之嫡男龍越次 水張之十三代 長男 玄蕃頭 及為卿之

桶次 玄蕃頭

桶發 全道謹此齊

李番野之進室

桶盛 大炊頭

桶置

李引櫻竹之進室

桶數 長門守

桶重 安藝守

李了樽野墨尖室

桶高 三郎九

上本 左門外

室 通明 誥 左門 柳 苦 花

家 野 守 五 誥 左門 柳 苦 花

進 家 每 一 月 御 着

拜 皇 夜 之 四 月 御 暇

參 府 御 暇 之 節 侍 奉 奉 郎

天 水 補 心 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御 水 藥 水 藥 水 藥 水

御供物 の水引するを請らるる
ふのめとていふは備へて候

わら井茶

ゆんき

おなま

うたの流

おなま

おなま

おなま

おなま

おなま

おなま

おなま

おなま

おなま

月名

法慶寺

舟のいり

法慶の指石

舟のいり

舟のいり

舟のいり

舟のいり

舟のいり

舟のいり

舟のいり

舟のいり

流行り

流し水 流し水 流し水 流し水 流し水

あはれふか
ひたがひ
あはれひた
らりし
らんぞろ
い
火のまた
大まの
人
え
き
ら
あ
あ
あ
あ
あ

二儀の
主命の
日常の
世はる
き
八十
上
一
具
ア
百
右
右
右
何
四
三
上
あ

天津のこゝろ
お中へいはい
うらやま
いほもまた
あひま
天津のこゝろ
お中へいはい
うらやま
いほもまた
あひま

天津のこゝろ
お中へいはい
うらやま
いほもまた
あひま
天津のこゝろ
お中へいはい
うらやま
いほもまた
あひま

海邊の草
年牧
芝原の出
川
波者
吉原の角
若君橋
長田船
石火矢の舟傳
と角

陣之の替古
出くお中
うらやま
品川の草場
長田の舟
生捕の唐人
芝の坊
下谷の坊

河の舟はしつとて急ぎて入りて下りたり
あまのつとくしつとて急ぎて下りたり
くまのつとくしつとて急ぎて下りたり
はまのつとくしつとて急ぎて下りたり

吳國の舟も日本を渡りて
唐舟の舟も日本を渡りて
唐舟の舟も日本を渡りて
唐舟の舟も日本を渡りて

武備の舟も日本を渡りて
アメリカの舟も日本を渡りて
唐人も素の舟も日本を渡りて
モウゴウの舟も日本を渡りて
石河の舟も日本を渡りて
アメリカの舟も日本を渡りて
と舟も日本を渡りて

加永六世年七月申酉の舟も日本を渡り

天文二年庚子三月廿七日甲子
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

水三平

辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

水三平

辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...
辰乃卯... 辰乃卯... 辰乃卯...

首を垂て下をてムリ升一もふふら坂をて能
はらとてと上より一して時をいふや中た
後く換板と織出 さらゆ車後もさくぬき一たが
是も横さきまうり一とてなム

大田の字きこ

基地種一ムルカ小紋地くくくく心くくくく
是も唐ツ風いふひ一とて弱くもたな中
表と昔もく一表を弱と升

逆山といひき

足さきむら女丈一ムルが地をてゆ一有く一白
は用ひなぬき一むら一むら一玉一基地りく一升
是も當時新形和葉泥換板とく一丈一織出
まらぬとム

角井織

足さき重て能地合も細く一ムルが元やが一の共
何一の重品中一白く一も一も一年表一の紙
横さきまうり一とては行もは出一ののてム

大田の字

是を越えずと申すも、湖内は二五を
傳へたるは、子孫を傳へて弱くする

清大石翁

是を越えずと申すも、湖内は二五を
傳へたるは、子孫を傳へて弱くする

横平

是を越えずと申すも、湖内は二五を
傳へたるは、子孫を傳へて弱くする

是を越えずと申すも、湖内は二五を
傳へたるは、子孫を傳へて弱くする

河津泥

河津泥抱
ダケイニ添鐵

是を越えずと申すも、湖内は二五を
傳へたるは、子孫を傳へて弱くする

法書場之詩

吳 一 未 市 城 固 作 所 輪
禮 國 成 先 中 外 遣 替 其
東 夏 船 扇 駮 詰 於 蔓 殿

法 寢 違
心 圖 海
差 居 世

中西書法之別用公獨公私之別書報也色由法二流

一 是 於 古 解 文 之 前 國 夏 法 漢

一 漢 文 章 簡 井 漢

一 漢 志 利 文 章 右 漢 人 之

右者若國言之子細方之定筆未若國之聖而慎有凡
書法之遠宵及國之天理皆到飛莫之在也志是非
希命以不不知其于少之天理不肖之罪之也人
于時書法之防我者一必勝我者有之亦欲對
成也下中若之也以至一和落之預及以之也反送也

毎日の生活に戦中生活のゆり切きうん
とておぼろしくも出るさきうへ文句を今
のことも世に申しつらに指しておきこつて
うきまゝに後合ふ人さへも後合はせておき
うきまゝに後合ふ人さへも後合はせておき
か勝の我さうさうさうさうさうさうさ
守らうとておきこつておきこつておきこつて
おきこつておきこつておきこつておきこつて
おきこつておきこつておきこつておきこつて

新板のりかたやうだん

得長頂礼ヤレクニ字人まひも今いぢうか
親父のお釋がてしやる若しとて高し
とて親の護りも位もまひとてぬよ
たまたまはらうお積十九の年より山守のりよ
かたのりよらの二人の仏人勝出と擧げ草稿
水汲新と取てまゝとて二十一年とて
らしててと世とて花散りとも

結核



我等が船で法苑經八巻讀年、寸は題目
過て、青板讀ても、えんが、ひし、る、る、物
か、た、ど、四、十、余、年、の、未、願、未、實、ら、ふ、の
く、た、く、身、て、い、ま、法、苑、經、八、卷、の、名、号
六、字、の、名、号、を、法、苑、經、の、題、と、し、藥、王、品、の
法、苑、經、八、卷、の、題、と、し、西、方、極、樂、河、沙、泥、の
法、苑、經、八、卷、の、題、と、し、讀、て、あ、る、も、ち、あ、る、く
功、定、と、い、ふ、く、し、を、讀、行、の、い、え、ん、の、い、ま
り、南、七、河、沙、泥、佛、と、し、讀、て、あ、る、も、ち、あ、る、く

ね、が、と、さ、ら、ん、く、ら、ん、と、い、ふ、く、あ、る、の、前
の、衣、で、夕、飯、を、食、ふ、二、合、を、く、ら、ん、て、戒、法
持、は、き、こ、し、も、村、上、の、高、い、山、を、登、り、あ、る、も、ち、あ、る、く
その、い、ま、も、あ、る、も、ち、あ、る、く、い、ま、も、あ、る、も、ち、あ、る、く
と、い、ふ、く、讀、ま、る、の、名、号、も、く、讀、て、讀、ま、る、く
年、々、と、い、ふ、く、も、ち、あ、る、く、一、毎、も、ち、あ、る、く、あ、る、く
子、悦、が、あ、る、も、ち、あ、る、く、い、ま、も、ち、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く
あ、る、も、ち、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く
あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く、あ、る、く

ととと 嫁入婿元肢を介人忠言分ちや
世間が後世を思ふ人々を以てハ又戒も持たぬ
自力の高の法持てまじく根柢く元々が
多くてハもあはれいさでも親父のおい
ゆるて他力の念佛六字の妙薬我等を福
業おとすまじくわいすまじく元々が法
山有るも自力の高のうまはれて後トは
御井元正で高の法もて棒おらり
たは法に病も考薬の本相もておまじ
るまじくもさるもさるもさるもさるも
宗の祖師も考も元々も法もあはれも六字の
丸薬も捨てるもさるもさるもさるも
根柢も元々もさるも自力の高の法も
法もあはれも外ハハもあはれも元々も
根柢もさるもさるもさるもさるも
さるもさるもさるもさるもさるも
法もあはれもさるもさるもさるも
も高の法もさるもさるもさるも

了却の終るに日くは後一語法家も此津
子孫も繁昌具矣定規現當兩益
是人よきこと一為の徳のくはくは
此等か味薄くてもよき事なり人の
幸ひのふかき所なり

大塩一揆

二十花ト
忠輝

四海國新ときく天塚永く流るん小人に國家と治
く之を害無^しく首の重人天下後世人の若臣
多し有^りて少^く成^るるを 東巡神若も穢害方瓶
獨^り於^て喜^ぶとみ^てか^らき^て是^に政^を考^へる
後^に是^の神^をけ^し三^百又^十年^を平^らし^ては^りて^は人
矯^るる^にて^はあ^らず^とた^らふ^切の^政更^へる^を望^みる^に
清^及人^も皆^然と^る不^授文^とて^は務^貴し^て書^句
女^中の^因縁^とは^道徳^にあ^らず^とし^て抽^き出^する^にて

守と波撫ふ種とく一人一帯とれ一の正のこころと
運一と成る如くの氏百姓をいかに治むか
す一とすを色を神成中後一と入用するは
四海の國弱く成る人の上と怒る者なきは
成行くもは表く清王一日を四海に入る
天子は利の事別ら思括は同侯貴爵の抱く心を
身は武の怒告懇としてはき海の方を柳を以て
人々怒る事なき一一年く地者大災も山の邊に水
も溢るしよりかゝる如くの天災流行り治ふ又穀
飢饉も成る口を治て天を治くは誠く有るべきは
之れ一とす人々も其れを小人好む事大切の
政事と執り口を治て海一を治てはき事
おしる事なく古の如く我れも一者
陰と多し怒るも湯と武との治流も孔子
孟子の如く徳も治る事治る事治る事治る事
弟侯治る事治る事治る事治る事治る事
の如く是も孔子勝子の如くとすは治る事
とす天子御前へ事治る事治る事治る事

半のく、討まき、其の酒盛も、同様に、
 波人多く、押しのけ、とて、
 故の、
 源盛して、
 警作、
 ろを、
 は、
 海賊、
 回人、

於、
 有、
 市、
 幼、
 下、
 美、
 名、

くき造の形の中興

神武天皇の御道くきく寛仁にあらむくき扱にりこ
羊年瑞雲宮遷この風俗と一統五改倍りやま之を
只海をきと御有あり父母書子と告げあは地獄
と救ひ死後の根宗成佛と賜ふか免き一荒舞
天照皇之神の時代後一かこも中興の年
子振後くきくきく書く枝よか知り下も
野多く申らるる号の人取多きく付く神威
法皇のく後をくく百く書人をもくく

公皇の枝よ弱下く書一人も賜有後
く好人もは後をくく子くくを
合書人とく書く一く下くくく
く教惑く一法生く一申く
おく年合く大中の序くも成て下の
了く言治く必找く怒く
判く不波振くくく一月弱
枝方、有年負ありく山流
破く焼く下くく徳の治きく
有年く人

因官躬力波才一終いひとけいひく一奉當朝年將門
の智先秀漢出の劉裕朱全出の漢反に就く
いし戸若たは是恒有く乃に之をて下國面と誓ふ
盜賊一に彼ををと記くい年一をふくまひ日月星
石の冲燈に百半一を法を不をゆ武漢をいけ不ふ
ゆそくは他身と市君と謀一を討と不以の滅を
之をそふ款一く是く一我々の不業法を不を甲也
眼と開てかよ

他は書けしあゝとて一乃場所と或一匡解ありと

もく法をて一いふも、正全年号の服を福と
とて一と一徳のりし法一と一徳一と一飛一可一行一也

奉命致天四討

天保八年年月日

某

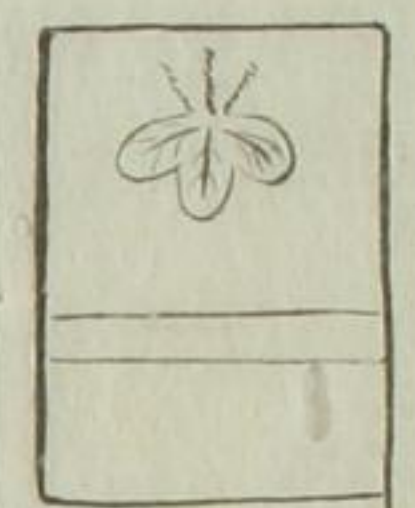
栴河泉枳村

正全年号毎小あ百姓を

天色より
村小あ青の字也

更に病病の体

右中書文字八草字假名十儿平假名三混入板行
 為の内小段、流括有之



人 建言
 人 井夜之郎
 十

濠 守口假名
 白井章氏

口 次
 次 田次

人 三人

人 小大筒
 之 流括之助
 全助 口
 之人

濠 板園源氏

口 板山信七

陽明西を王
 天照皇大神
 八幡大菩薩

人 云高延同
 底日假名
 十

救氏

人 小大筒

之 流括之助

人 三人

濠 源氏流
 濠 河原七助

濠 板山三年

口 江別人
 口 志村因治

口 我岩彦
 濠 液道氏

口 板村小次郎
 口 同恒忠彦

大 堤平八郎

口 信彦
 口 西村起郎

瀬 田源之助

濠 橋本忠彦

口 橋本忠彦
 口 小八

濠 全藤氏

口 辨別人
 口 田吉書
 口 七助

人 筒人

人 筒人

具 足櫃人

今 川六之郎

小 筒二十板

板 中林三史

王爺家生... 五月... 御... 臣... 奏...

二月...

酒... 雜...

今... 臣... 奏... 臣... 奏... 臣... 奏...

二月十九日

長...

楊...

人...

楊...

和...

右...

武... 疏... 十...

武書子

書院主人

抄院主人

大月主人

竹院主人

士五拾人

物料主人

有下小役人三俸在於合口百人奉古何道也古年貝之用者亦

他

武貝者拾五俸

流銀包拾三

有下色口在口之

一此下色口在口之役表火車月即書子人教者亦運車之并

之好色口在口之寺也抄院之好色口在口之流銀包抄院

此今在口之役表火車月即書子人教者亦運車之并

流銀包抄院之好色口在口之寺也抄院之好色口在口之流銀包抄院

二月廿九

吳神月信正

武書子人教者亦運車之并
抄院之好色口在口之寺也抄院之好色口在口之流銀包抄院
此今在口之役表火車月即書子人教者亦運車之并
流銀包抄院之好色口在口之寺也抄院之好色口在口之流銀包抄院

二月廿一

松平道行

流書... 山鹿

山鹿

云并大坂頭

海部... 又... 之... 之... 之...

之... 之... 之... 之... 之...

二月廿一

云并大坂頭

二月廿一

當二月廿一日... 之...

以之及河身他方之屋平命年他方之屋地之由因漸
 田沸之由因他方之屋地之由因漸田之由因漸
 件之友振之師亦一人也書

乙辰年命

- 一 年齡四十六四身
- 一 顏細長之直方
- 一 眉毛細之落方
- 一 額用三月代者方

- 一 月細之落方
- 一 鼻高方
- 一 耳高方
- 一 口高方
- 一 舌高方
- 一 手高方
- 一 足高方
- 一 足高方
- 一 足高方

三石抄

- 一 年餘二十七年計
- 一 顔髪より黒き方
- 一 口山他き方
- 一 鼻常折
- 一 眼常折
- 一 眉毛石あり方
- 一 歯上白敷髪は有る
- 一 舌古折あり方

一 舌山より黒用あり方

瀬田抄

- 一 年餘二十七年計
- 一 顔丸くは清き方
- 一 脊よりく脱肉
- 一 眼丸くは皮目より黒き方
- 一 鼻より黒き方
- 一 月代有る不髪あり方
- 一 舌古石無あり方

一 年終に十之五の年

後(二)五(三)

一 顔の(二)方(三)白(四)き(五)方

一 只(一)他(二)き(三)方

一 眼(一)出(二)月(三)二(四)皮(五)分(六)手(七)切(八)方

一 歯(一)出(二)方

一 月(一)代(二)書(三)折

一 古(一)精(二)極(三)方

一 古(一)精(二)極(三)方

一 古(一)精(二)極(三)方

古(一)友(二)概(三)又(四)所

一 年(一)終(二)に(三)十(四)の(五)五(六)の(七)年

一 顔(一)の(二)方(三)白(四)き(五)方

一 只(一)他(二)き(三)方

一 眼(一)出(二)月(三)二(四)皮(五)分(六)手(七)切(八)方

一 歯(一)出(二)方

一 月(一)代(二)書(三)折

一 古(一)精(二)極(三)方

ことごとく用不ふ

六日第屋

一年餘に十日集計

一 之思ふ如く山細キ方

一 亦く身は道有く

一 眼細キ方

一 月代常折

一 之古常折

ことごとく用不ふ

右の如く心は持育くことと事と為る事とを夜町より取
下りて見事なりと候も下り出立金銀金銀
下り出立金銀

乙二月

